

清水光雄

Mitsu Shimizu



一緒に年取れずに
ごめんね

妻ががん患者に
なったとき

清水光雄
Mitsuo Shimizu

妻ががん患者に
なつたとき

一緒に
年取れずに
ごめんね



一緒に年取れずにごめんね

1999年4月1日初版第一刷発行

著者 清水光雄
発行者 田部井満男
発行所 株式会社小学館
〒101-8001 東京都千代田区一ツ橋2-3-1
電話 編集／03-3230-5414
制作／03-3230-5333
販売／03-3230-5739
振替／00180-1-200
印刷所 藤原印刷株式会社

©Shimizu Mitsuo
Printed in Japan ISBN4-09-387283-X

造本には十分注意しておりますが、万一落丁・乱丁などの
不良品がありましたら、「制作部」あてにお送りください。
送料小社負担にてお取り替えいたします。

☐本書の全部または一部を無断で複写（コピー）することは、
著作権法上での例外をのぞき、禁じられています。
本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター
（03-3401-2382）にご連絡ください。

¥1600

表紙絵——木野烏乎
装幀——堀渕伸治◎tee graphics
編集——高橋浩太郎

目次

第1章	あと半年	7
第2章	奇跡が起きた	23
第3章	二度目の新婚生活	45
第4章	こつちを見るな！	65
第5章	毎日死ぬ事ばかり考えているんだから！	87
第6章	姉ちゃん背中流そうか	109
第7章	また稼いで来る	127
第8章	最後の手術	149
第9章	よみよう八か月	171
第10章	最後の賭け	187

第11章

感傷旅行 207

第12章

さらば友よ 223

第13章

一緒に年を取れずにごめんね

239

第14章

自然の雄大さに黙すのみ 255

第15章

私、まだ死にたくない 273

第16章

遙か遠い春 291

第17章

ずっと君と一緒だよ 305

終章

家族からの手紙 337

ここから先は純愛でいくしかない 立松和平

346



一緒に年取れずにごめんね

清水光雄

第1章

あと半年

余命告知

阪神大震災、地下鉄サリン事件と大災害、大事件が相次いだ一九九五年。オウム真理教の教祖が五月には逮捕され、世間的には事件も一服した。しかし、六月に入ってもオウムの逮捕者は続き、一方震災被災者は未だに避難所暮らしを強いられ、私が筆頭デスクを務める毎日新聞社会部は余熱のような熱気がこもっていた。そんな暑気を払う梅雨の雨が降り続く六月十九日、私は妻洋子の病状を聞くために、東京のベッドタウン、千葉県船橋市の船橋市立医療センター外科外来病棟に来ていた。

「奥さん、悪いよ。思ったより悪い」

佐藤裕俊副院長（現院長）が洋子の退席を確認した上で、カルテをめくりながら話す。外科医特有の張りのある声は、診察室の外にまで響きそうだった。

「内科部長に、エコー診断をやってもらったが、がんは肝臓に転移している。先程奥さんには転移を聞かれ、質問を逸らした。私がカルテに赤く丸しているように点々と無数に出来ている。誰にお聞きになってもいいが、もうどうしようもない。かわいそうだな、まだ若いんでしょ。四十六歳か。たちの悪いもの、血行性だったのかな」

頭がクラクラする。大腸がんで手術は不可避とは彼女共々聞いていたが、腫瘍の性質は穏健で切れれば全快するものと思っていた。最近では会社でも、がん病棟から生還した人は多く、ことに大腸がんの術後は良く以前より元気になっている例さえ見聞きしていた。が、次の一言がすべての樂觀論を打ち

碎いた。

「余命は半年くらいかな」

大腸がんはS状結腸の部分に出来て腸管を圧迫し、リンゴをかじって芯だけになったような「アップルコア」と呼ぶ腸閉塞状態になっている、切らなければこちらが原因で死期はもっと早まる、大腸がんを切除する手術は緊要だが、その後は打つ手はない、肝臓がんが大きくなって肝機能を失わせて死に至る、と言うのだ。

華奢だけど健康自慢だった洋子。秋田市の中学時代の同級生だった。あの頃、ソフトボール部で四番サード。今でも「私は長嶋洋子よ」と言っては家族を笑わせた。ずっと一緒だった人が突然死の宣告を受けた。若い看護婦が気の毒そうな目でこちらを盗み見る。

「手術後は家に帰ることができますか?」「旅行は出来ますか?」

平静さを装った私ができた質問はこの程度だった。佐藤副院長は手術後しばらくは健康状態はいいから小旅行ならできる、と言った上で

「後はあなたが奥さんのために何をしてやれるか、でしようね」

と繰り返した。

話は数分だった様な気がしたが、

「随分長かったじゃない。何話してたの」

と待合室の洋子が心配そうな顔をしていたので三十分は経ったのかもしれない。会計と薬を待っている間、一度だけ洗面所に立ってドアを締めて、顔を洗った。鏡で見たら目が赤い。気取られてはいけないう。

一旦会社に戻った私は社会部のデスク会を終え、早々と午後八時頃に家に帰る。

「私のこと、心配して？」

と洋子が言う。仕事にしろ遊びにしろ夜遅い社会部記者が、早く帰るのは良い知らせであつた試しはない。感づいたところがあつたかもしれない。

私は机のワープロに向かった。入社以来四半世紀社会部系統にいて、悪事、慶事含めて人と会つて話を聞いて原稿を書き紙面に掲載する作業をしてきて、自分の気持を落ち着かせるには書く事が一番と分かつていたからだ。余命を告知されたこの日から、記録を連日付けることにした。

前文にこう書いた。

へ記録を始める。日記等洋子の目に触れる可能性があるものを書くわけにはいかない。私自身の精神安定のためにも、何かに書き付けることが必要と判断した。

清水洋子 一九四八年十月八日生れ・四十六歳。 光雄 同年十月十日生れ・同い歳。七三年五月

二十日結婚。 長男 淳 七四年三月十一日生れ・早稲田大四年。 長女 有紀 七七年五月二十二

日生れ・船橋女子高三年。そしてもう一匹 犬のポコ・メス八歳。ゝ

へ二人は兄妹のよう、と私は思っている。共に秋田市出身で、中学の同級生でずっと一緒だったから、気持ちばかりあえる。それでも今日の段階では医師の診断を正直に告げる勇氣は私にはない。もつと手を尽くして、闘って、しかるのち、結果がどう出ようとも、それは運命かも知れない。が、闘わずして手をこまぬいて意々諸々と医師の診断、いやがん如き、の蹂躪に任せておくものか

「基本戦略」を考え（一）延命。（二）効果的治療。（三）本人の満足度。（四）子供たちへの影響。（五）実家、親族へ知らせる範囲。（六）光雄の仕事との兼ね合い。（七）最悪時へ向けての対応——の七項目

を作り、それぞれ思い付く対策を書き出してみた。末尾に

「こんな事まで検討していただよ」とこの記録を見せながら笑いあえる日が来る事を祈って、ここに記す。」

と書いた。元気が出てきた。

彼女の寝入りばな、手を握ってみた。何時もなら嫌がるのに指を絡ませてきた。手首を握ると私の指からかなり余った。中学の時からスリムだったが、「がん」の診断を受けてから余計細いように感じる。がんを吸い出せるものなら吸い出してやりたい。末期がんというが自覚症状は全く、ない。昼間の話が白日夢だったような気がしてならない。悲しみが間欠的に襲って来る。

「何故こんな事になるんだ」、「俺をおいて先に逝くなよな」と。

初めての検診

彼女の体の変調は四月頃から聞いてはいた。私の性格が、社会部記者の業か、何事もまず「山より大きい猪はいない」と言う感覚で受け取ってしまう。一大事を小事に格下げして、見下してしまう。大事件に遭遇してもパニックにならないための仕事上の心構え、ではあるのだが……。病気についても当初、随分と軽くみていた気がする。

洋子は一年前の九四年八月から、ビルメンテナンス会社「アヅマ」に正社員として勤めていた。八丁堀にある住友ツインタワービルに派遣されて、住友化学の受付・案内・お茶汲みをしていた。新聞の求人案内で見付けたものである。これまでもパートに、内職に臨時の様々な仕事をしてきたが、子

供が大学、高校生となって手が掛からなくなって正社員目指して、「この年になるとお掃除オバサンくらいじゃないわね」と言いながら、アヅマの面接を受けて採用された。朝六時には出掛けて、会議室から仰ぐ富士山に感激したり、同僚の若い女性やらベテランやらと食べ歩きに凝ったり楽しそうだった。

初めて正社員に採用されたことが、がんの発見につながった。企業では健康診断が必須だったからだ。この会社で受けた健康診断が正式なものとしては学生時代以来初めて、とは私も初耳だった。これまで私の会社が実施する「ママさん検診」を勧めても行った事はなかった。彼女の健康自慢の裏には医者を敬遠する嫌いがあつたが、忙しい主婦にはありがちな事と思う。

彼女はこの年だけ日記を付けていた。前年暮れ、私が毎年求める日記帳を見て「私にも頂戴」と言つたのだった。がんが発見されるまでの経緯をこう綴っている。

へ九五三年三月十六日（木） 健康保険組合から健康診断の通知がくる。三十一日と言う事だ。エーッ!! イヤダ、心の準備ができてないよ!! 普通のレントゲンだけなら何ともないが、バリウムなど飲んだことがない。皆が「絶対ゲップはしちゃいけないんだよ」とか、直ぐ下剤飲まないと後が大変なんだからと言つて脅かす。それよりも子宮検査の自己採取。検便などイヤダナ——。「もし異常が見付かつたらどうするの!!」と言う感じである。この年まで本格的な検査などしたことがないほうが、皆にとつてはオドロキなのだが、そう言えばこれは父親譲りの医者嫌いが私の中にも濃厚に流れていると言ふ事かしら……。

父親は彼女の後を追うように九八年に八十三歳で亡くなったが、その寸前まで医者に掛かったことのない人だった。彼女の冗談みたいな悪い予感の当たり、検便から出血が確認される。

〔四月二十一日（金）〕折角の楽しかるべき金曜日の夜も一通の通知で気の重いものとなる。検診の結果、異常アリ。もう一度腸の検査、と言うことで気が重い。がんだったらどうしよう。仕事も軌道に乗って、長くのんびり勤められると思っていたのに……と悪い方へ、悪い方に考えてしまう。〕

〔五月四日（木）〕映画から帰ってきたら、再診の結果、またクロダ。ああやはり入院か？ 一瞬ボートとしてしまうが、もう覚悟はできている。どう家族に打ち明けようかと思っていたが、案外すんなりと言えた。〕

「精密検査を病院でして下さい」という指示に基づいて、彼女は自宅にあったサンデー毎日の別冊『名医師』を繰って、船橋市の医院「高良消化器内科クリニック」を決める。女性友達に急かされて背中を押されるようにして行つた。この辺は私の記憶にはほとんどない。当時、オウム事件の首謀者、松本智津夫の逮捕が迫っていて、社会部は忙しかった。四月から筆頭デスクに昇格して、ローテーションには入らず紙面・人事管理が業務の中心だったが、何十年に一度の事件に自分の人脈でできる範囲の朝がけ、夜討ちはした。無論仕事ばかりではなく、夜の飲み会や当時凝っていた競馬にも熱心で、彼女の変調にはほとんど気を遣わず、彼女自身に独りの闘いを強いていた。日記は続く。

〔同二十一日（日）〕今日は検査の日。やつぱり異常ありだった。ショック。がんである可能性は一割とか。医者が一割というのだから三割くらいの事だろうか、などとボーとしながら考える。これに続く記述は我ながら情けない。半面、彼女の明るさも示している。

〔家に帰って、光雄さんに何と言ったらいいか。話すとき涙が出そうになるので、コタツの前で一人、買ってきた大福にバクバク食らいつく。光雄さんといえば馬券の色塗りに余念がない。こっちを見もしないで、色を塗りながら「どうだった」とコタツの向こうから聞く。もうこの大福、見掛け

とは大違いで、やたらと皮が厚く、なかなかアンコまでたどり着かない。何と美味しくない大福だろう。それでもバクバク何もいわずに食べているうちにポロポロ涙が出てくる。光雄さんはこの異様な光景にやっと気が付いてびっくりしていた。

そして幾つかの検査を経てがんの恐怖を十二分に味わいながら、告知される。

へ六月十日（土） Ⅱ いよいよ宣告である。「腸の狭くなっているところに、やはりがん細胞が見つかりました。中程度のがんです。比較的穏やかなものです」と言う。帰りの電車もバスもボーツとして、乗っていた。「この混雑するプラットホームで、たった今、がんの告知をされた人などそうざらにはいまい」などとボーツとする頭で思う。帰ってから、家族にどう言ったらいいか、と思っていたが、案外あっさり告げることができた。

彼女の話を聞いて、私は「軽いな」と勝手に判断した。個人病院のこの医師も私も、何の根拠もなかった訳だが。

私の実家は病院とは縁が深かった。小学六年の時には父親が肺炎であやうく臨終間際となり家族・親戚が病室に集められた事があったし、学生の時兄が草刈り機で足を切り、障害を負う一歩手前までいったりした。普段でも両親が高血圧等で病院通いする姿を良く見た。対照的に彼女の実家は健康的で、病院とは無縁だった。彼女の入院歴も結婚後、二度のお産と有紀の運動会に出て縄跳びでアキレス腱を切った時だけ。この時も自転車に乗って片足漕ぎで帰ってきたり、ケンケンしながら家事をしたり、入院後も「我が家が心配」とわずか三日で退院した。私は「病院なんか大した事ないから。いままで健康的過ぎて洋子ちゃんが行ったことがないから不安だろうけど」と本気で言った。

がん告知した個人病院の紹介で、船橋市医療センターで手術をすることになったわけだ。がんは臓